



大分県文化財調査報告 第24輯

御陵古墳緊急発掘調査

昭和43年度緊急発掘調査

序 文

急速な地域開発事業の進展のなかで、文化財の保護、とりわけ埋蔵文化財の保存と継承の問題は、いよいよ緊急の課題となってまいりました。人類の永遠の故郷ともいえるべき自然環境の保護とともに、それはもはや、一部の人の理想や趣味の問題ではなく、すべての人にとって現実的な必要の問題となりつつあります。

本県でもこのような時代の要請に対応して、本年度から文化室を発足させ、文化財保護行政の面での、一つの前進をみることができました。

もとより、急激にすすむ開発に対処するには、まだまだ不十分といわなければなりません。宇佐市内における相つぐ調査、「風土記の丘」という、史跡と自然をふくめた広域保存構想への取り組みなど見るべき成果をあげつつあります。

この報告書にとりあげられた「御陵古墳」は、いわゆる「碩田の君」の墓と推定される前方後円墳として周知されたものですが、昭和43年という時点において破壊のやむなきにいたり、文化財保存事業のうえで、大きな試練となり教訓となった遺跡でした。この報告書を記録保存という形でしか刊行できないことを、誠に遺憾に思う次第です。

おわりにこの報告書が、郷土の生いたちを解明するうえで、一つの新しい手がかりとなることを期待し、あわせて別府大学教授賀川光夫氏、同大学助教授小田富士雄氏をはじめ、調査関係者各位の献身的なご協力に対し、深く謝意を表します。

昭和 47 年 3 月

大分県教育委員会教育長職務代行者

教育次長 伴 了 三

凡 例

- 1 この報告書は大分県教育委員会が、昭和43年度国庫補助事業として実施した、御陵古墳緊急発掘調査の報告書である。
- 2 本稿の執筆は小田富士雄氏の手をわずらわした。

目 次

1	調 査 の 発 端	1
2	調 査 の 経 過	2
3	古墳に関する既往の事実	3
4	古 墳の立 地と 環 境	6
5	後円部内部主体の調査	7
6	古 墳 外 形 の 調 査	12
7	結 語	14

挿 図 目 次

第 1 図	御陵古墳と木ノ上住宅団地造成工事計画図の関係	1
第 2 図	大分平野における主要遺跡分布図	5
第 3 図	第一号遺構実測図	8
第 4 図	第二号遺構実測図	9
第 5 図	出土遺物実測図	10
第 6 図	御陵古墳外形実測図	11
第 7 図	墳丘土層の調査実測図(1)	13
第 8 図	墳丘土層の調査実測図(2)	14
第 9 図	御陵古墳墳丘縦断面土層図	14~15

図版目次

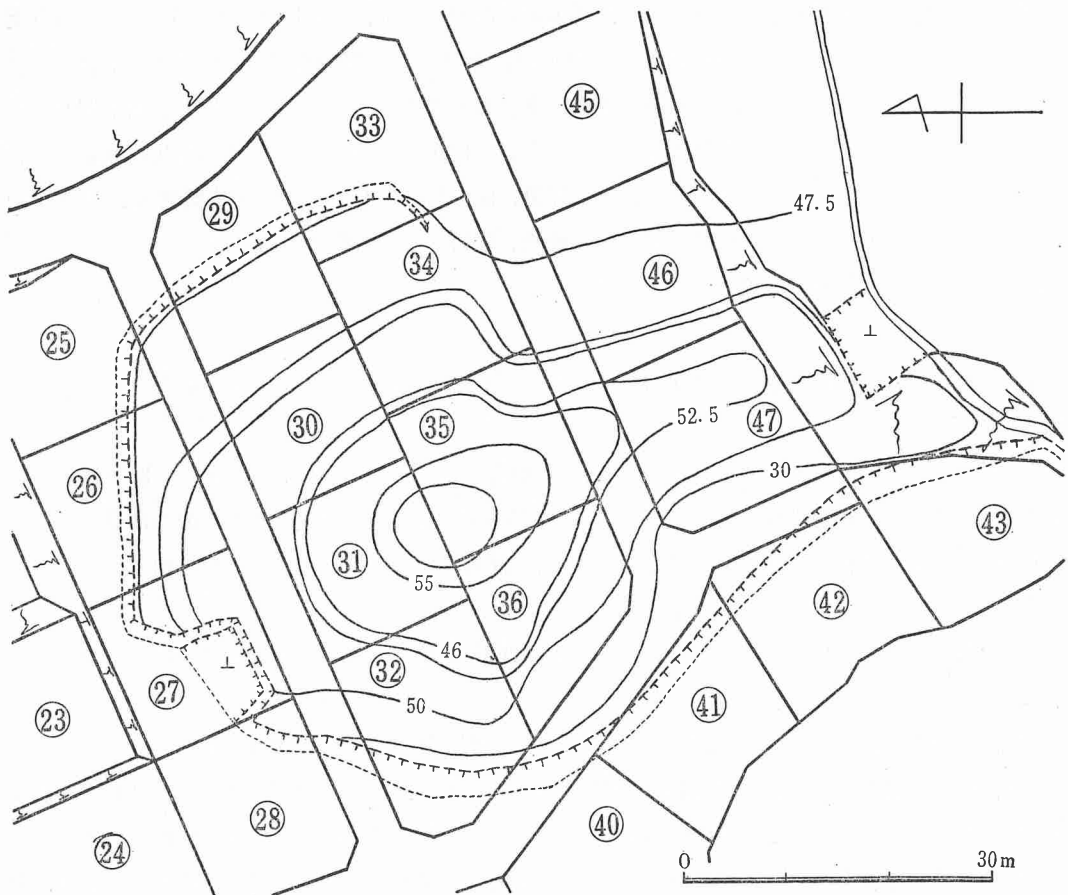
- 図版第1 (上) 遺跡遠望
(下) 調査前の遺跡近景
- 図版第2 空から見た古墳
- 図版第3 墳丘近景
- 図版第4 (上) 後円部内部遺構
(下) 二号遺構
- 図版第5 (上) 一号遺構(東南より)
(下) 一号遺構(北西より)
- 図版第6 一号遺構の石材抜き取り痕跡
- 図版第7 (上) 一号遺構玉類出土状態
(下) 二号遺構玉類出土状態
- 図版第8 後円部内部主体発見遺物
- 図版第9 (上) (下) 墳丘切断作業
- 図版第10 (左) (右) 後円部北側葺石出土状態(一段目)
- 図版第11 (上) 後円部東側葺石出土状態(一段目)
(下) 後円部東側葺石の二次集積(一段目)
- 図版第12 (左) 後円部東側葺石出土状態(二段目)
(右) 後円部東側葺石出土状態(二段目)
- 図版第13 (上) 前方部南西隅葺石出土状態
(下) 前方部東側葺石出土状態

大分市・御陵古墳調査報告

1 調査の発端

新産業都市建設法案が可決されて、大分市とその周辺に広域産業都市が建設されることになった。新産業都市は、工場立地可能な地域を選んで工場用地とするものであるが、その周辺地域には工業水路、道路、住宅団地などの造成が付加して起るので、風土の変貌著しく、埋蔵文化財に蒙る被害は無視しえないものがある。昭和43年度に調査を実施した大分市大字木ノ上字原にある御陵古墳は、高台に位置する前方後円墳であるが、大分県住宅供給公社がこの地域を購入し、積立分譲住宅を建設するために昭和42年度から整地作業にかかり、本古墳をのこすのみという状態であった。そこで関係当局と交渉して工事完了の時期を古墳調査終了まで延期してもらうこととし、緊急調査を実施するにいたった。

第1図 御陵古墳と木ノ上住宅団地造成工事計画図の関係
(○内数字は宅地ナンバーを示す：大分県住宅供給公社 提供)



2 調査の経過

発掘調査は昭和43年5月6日から25日まで20日間実施した。調査団の構成は次のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会		
調査団長	賀川 光夫	別府大学教授、大分県文化財専門委員	
調査員	入江 英親	杵築高校教諭、大分県文化財専門委員	
	小田富士雄	九州大学文学部助手（調査実施当時以下同）	
	内藤 芳篤	長崎大学医学部助教授	
	鈴木 重治	南九州大学助教授	
	今永 清二	別府大学文学部助教授	
	後藤 重巳	〃	講師
	橘 昌信	〃	助手
	岩尾 松美	〃	囑託

調査補助員

九州大学文学部大学院学生 亀井明德
 別府大学文学部史学科学生 安楽 勉、野間重孝、山田島常方、江上幹幸、松本和男、首藤卓茂
 谷崎良晴、二宮忠司、高木正文、阿南省三、丸山武水、小倉正五、
 山崎純男、横山邦継、清水宗昭 （以上、前半期参加）
 野間重孝、江上幹幸、中村修身、岡田宣宏、平山吉久、赤瀬 恵、
 西村隆司、下玉利勇、横山邦継、桑原道男、波多野直人、永渕 勉
 小倉正五、東 政治、塚原 博、宇都宮史絵

大分県教育庁社会教育課主事 安倍豪希

調査に際しては、後円部中央を通る巾2mのトレンチを南北18m、東西14mにわたって設定して発掘をはじめた。

後円部中央において長方形の土壌があらわれ、組合せ箱式石棺の石材を抜きとった跡が確かめられた。つづいてその北側に接してやや小形の土壌がならんであらわれた。こちらの方は原形の破壊が著しいが、やはり箱式石棺であったと思われた。前者を一号石棺、後者を二号石棺と称することとした。

主体部の調査と併行して墳丘の各所にトレンチを設けて葺石の探索や封土の築成状況の調査を行った。

5月10日からは古墳外形の測量調査に着手し、15日に完了した。縮尺300分の1。

5月13日には調査後、古墳が湮滅する運命にあることを考慮して朝日新聞西部本社に航空撮影を依頼したところ、たまたま宮崎県に飛行便があったので、本古墳最後の姿をカメラにおさめることができたのは不幸中の幸いであった。同日、安倍主事を通じて県教委社会教育課と県住宅供給公社に最

終接榫を願い、保存の可、不可について最終の返事をうかがったが、調査後の破壊は決定的ということであった。そこで調査員一同緊急に会議を行って破壊が決定的ならば、この調査期間中に調査団側の希望するようにブルドーザーを入れて墳丘の縦断作業を行い、墳丘築成状況の完全な記録を作成する方針をきめた。そこで県住宅供給公社に協力を申し入れ、翌14日からブルドーザーによる墳丘主軸線にそって東半分の封土を除土して縦断面土層図の作成に着手した。墳丘の高さ8メートル以上に及ぶものであるから、垂直に切断して基底面にまで及ぼすのは調査員の生命に危険を感じるところであった。そこで2~3m切断してはその部分の土層実測図を作成してゆく方法をとって、別に監視員をつけておいて危険になれば何をしておいても逃避するようにという趣旨を作業員に徹底させた。幸いに事故もなく所期の目的を果すことができた。

一方、調査の合間をぬって付近に所在する周辺遺跡の調査を行った。その概要については先に刊行された「昭和43年度緊急発掘調査概要―御陵古墳とその周辺―」（昭和43年刊・大分県教育委員会）に述べられている。

3 古墳に関する既往の事実

本古墳については大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第16輯（昭和16年）に収録されている「大分郡古墳調査一覧表」に「木ノ上古墳」（植田村大字木ノ上字高崎原1073、山林2畝20歩）の各称で登録されている。前方後円形の平面、側面の見取図をのせ、全長二百十尺、前方部巾百四十尺、後円部高さ三十尺なる註記がある。さらに次のような記述がある。

備考 イ部（平面図の後円部中央―筆者註）に石棺を発掘したる跡あり石棺の破片と見るべき緑泥片岩の小片を存す。

現状 大分郡植田村を通ずる熊本県道に沿いたる木ノ上部落に、県道より南に向って高さ約六十米巾、三百米位の丘陵、十町許りも長く田圃中に横たはれり。木ノ上古墳は其中央部にあり。雑樹密生して全形を察し難し。頂上に石碑あり、古皇之御陵と刻せるも、近代の建立にして何等根拠あるものにあらず。然れども其の規模の宏大にして形式の整備せる我国古墳時代に於ける高貴の人の墳墓たることは疑なし。石棺の緑泥片岩より成りて築山古墳大内古墳など同一なるは年代推定の一資料とするに足らん。

この古墳の東側にある善明寺には、先代住職菅原大石氏の著した「清風明月」（昭和14年9月発行）なる冊子があり、調査中拝見するを得たが、その中に次のような記載がある。

付録その3 古皇之御陵

当北来山善妙寺より約一丁程西南の小高い山に「みささぎ」と呼ぶ処がある。草木鬱蒼として繁茂せる中に正面には「古皇之御陵」と大書し、向って右側面には「享保十八丑歳」向って左側面には「十二月朔日造立之」と記せる古墳が鎮座ましまして居る。そこで余は友人念仏軍曹と相計り、昭和十年一月四日当寺門徒及び附近の人々を集めて道路を修繕し雑草を切払い灯明を上げ御酒餅を御陵墓前に供えて經典を誦誦し御霊に敬吊し、爾後毎月一回づつ参拝誦経して居るが、若し此れが真の御陵であるならば現状のまま放置しては余に恐れ多く且つ勿体なきことと存じ其御調査を植田

村長を経て大分県知事に上申したのは昭和十二年五月十一日であったが、未だ何の沙汰も無い。又附近の浅草神社の境内には古い石棺の破損して居るものもある。天下の史家の研究を待つ。

以上の記録によって古墳の名称の由来、また当地方篤志家の手によって昭和10年ごろに顕彰されんとした事情を知ることができる。さらに享保18年に「古皇之御陵」なる石碑がおかれたというのは、現在後円部にみられる墓石大の石碑をいうのである。現在では伝承の拠って来るところは不明となってしまったが、江戸時代にはそのような伝承でもあったのであろうか。あるいは景行天皇巡幸伝説の地域に含まれるので、地方史家の比定するところでもあろうか。また一説には用明天皇に関する説話がこの地方にあるともいわれる。いずれにせよ高貴の人の墓所に比定され、すでに江戸時代後期に顕彰するところあったものである。

今回の調査期間中に、本古墳に関する聞きこみ調査を行ったので次にそれらの結果をまとめておく。

(1) 昭和9年または10年ごろ、本古墳の後円部を熊本県の某氏が盗掘し、石棺中より大刀および玉類を発見した。人骨も発見されたという。それらは古墳の北西に隣接している親蓮寺の堂近くに置いた。箱式石棺の石材もすべて抜きさり、善妙寺および付近の農家に持ち去った。発掘に立会い、詳細を知っているのは柳井富人、仲野八郎の二氏で、発掘時の写真が善妙寺に保管されているであろう。

別にこの古墳から鉄剣と鏡？を持ち去ったという話もある。

(2) 仲野八郎氏（大柳部落在住、78才）の談話によれば、氏が植田高等小学校3年のとき、同校教諭で歴史担当の石川藤五郎氏（中津市出身、5、6年前死亡）に引率されて石棺二基を発掘した。その位置は後円部二段目の主軸延長線上である（氏が現地に臨んで示した地点）。石棺は地表から1尺5寸ほどで、周囲に石があり、棺内より各々1～2本の刀および鐔、人骨を発見し、小学校に保管していた。

以上の仲野氏の話は明治40年前後ごろに発掘した事実を伝えるもので、氏の示す地点は記憶ちがいではないかと思われるところがある。

(3) 昭和9～10年ごろに念仏軍曹なる熊本県の人古墳の後円部を清掃し、石棺を発見した。詳細は仲野俊男氏（74才）が知っているそうであるが、調査期間中に会うことはできなかった。このことについては前述の善明寺先代住職菅原大石氏著すところの「清風明月」にも記されており、我々の聞きこみ調査でも知られたのは上述のとおりである。

(4) 柴崎春海氏（大柳バス停前在住、歯科医・75才）宅の庭に御陵古墳から般入したという緑色結晶片岩の板石（ $1m \times 1.5m$ ）がある。石棺の蓋石であろうと思われた。家人の話では明治のはじめごろに搬入したものと伝えられている由であった。

以上の諸話を総合すると、本古墳の主体部には石棺があり、明治40年ごろと昭和10年の2回にわたって発掘が行われたようである。いずれも学術調査ではなかったので、完全な発掘でもなく、また詳細な記録ものこされていない。また、墳頂に享保18年の石碑があるところをみれば、このごろに最初の発掘があった疑いも残される。



第2図 大分平野における主要遺跡分布図

- 1 御陵古墳 2 千人塚 3 浅草神社古墳群 4 小岩山横穴群、磨崖仏 5 木の上石棺群
- 6 木ノ上横穴群 7 山伏古墳 8 高瀬磨崖仏 9 雄城台遺跡 10 世利門古墳 11 漆間古墳
- 12 虎御前古墳 13 漆間横穴群 14 豊後国分寺 15 千代丸古墳 16 丑殿古墳 17 蓬来塚古墳
- 18 永興寺 19 豊後国府跡 20 金剛宝戒寺 21 三芳（亀甲山）古墳

さらに本古墳から刀剣、玉の類や人骨が発見されたということは、後述する今回の発見遺物からも事実と認めてよいであろうが、一部に伝えられる鏡鑑の発見にいたっては今や確認する術がない。

4 古墳の立地と環境

大分平野を貫流する大分川は、さかのぼれば南部で分れて支流の七瀬川に入る。七瀬川は平野南縁の山塊裾に沿って、その名のごとく幾度も曲流して瀬をつくり、木の上のあたりで北側から帯状に延びた丘陵を大きく曲流して上流に至る。このあたりは大分平野の南奥で、この南北に延びる帯状丘陵はあたかも関所を形成しているようである。丘陵の中は約200m、基部は大分から竹田に通ずる国道で切断されている。丘陵の東、西は水田をなしているので、丘陵の景観は遠くからも望まれる。丘陵上は水田からの比高30mほどである。そのほぼ中央に主軸をほぼ南北におき、前方部を南に向けた前方後円墳、御陵古墳がある。遺跡に至るには国道が丘陵の基部を通る東裾の大柳バス停または西裾の木の上峠バス停から徒歩で登られる。古墳の北西には親蓮寺がある。前方部の南には通称千人塚なる小円墳があり、さらに南行すると浅草神社に至るが、その境内には石棺一基と小円墳三基がある。また丘陵の南端は七瀬川に望んだ水蝕崖をなし、横穴群や磨崖仏がみられる。親蓮寺西方の丘陵西縁近くには三基の箱式石棺が封土をとられてのこっており、人骨が棺内にのこされていた(木の上峠石棺群)。

国道の北側山中には、御陵古墳の西北約500mをへだてて標高74～78mのあたりに計13基の横穴群がある(木の上峠横穴群)。その西方には通称山伏古墳といわれる箱式石棺であったと推測される古墳跡がある。その概略は現地に正徳6年に建立された「真如玄海法印」なる石碑に刻まれた由緒によって知ることができる。これらのうち、千人塚、浅草神社境内の石棺、木の上峠石棺群、木の上峠横穴群については先に刊行された「昭和43年度緊急発掘調査概要」に報告されている。⁽¹⁾

国道を北行すると北側の上芹部落背後の山中には石棺内に5遺骸を合葬したことで知られる世利門古墳があり、未調査の円墳や横穴群が点々とみられる。国道の東側、雄城台の台地上には弥生中期から後期にわたる弥生集落があり、昭和39年富来隆氏の調査、昭和46年には大分県教育委員会の調査が行われている。⁽²⁾⁽³⁾

歴史時代以下では七瀬川の南山麓、高瀬部落の背後には有各な高瀬の磨崖仏がある。⁽⁴⁾

御陵古墳周辺には箱式石棺を主体とする小円墳や横穴が多く、それらは5～6世紀にわたって築造されたものであるが、御陵古墳はなかでも特に群を抜いた存在である。

註 (1)刻名は次のとおりである。

摂州石工於此地欲彫不動石」像出石土中三尺許而大磐石」

上片石如置中有髑髏は無識」何世人何姓名也世伝此是山」

伏墓無明聞磬石刻塔基上」新題印号呈無朽者也」

岨正徳六丙申年」六月如意珠日建焉」

(2)賀川光夫「五遺骸以上合葬の一例」考古学雑誌44巻1号、昭和33年

(3)富来隆「弥生式「土器窯」址について(予報)」考古学雑誌50巻3号、昭和40年

(4)浜田耕作「豊後磨崖石仏の研究」京都大学文学部考古学研究報告第9冊、大正14年。

5 後円部内部主体の調査

後円部中央のトレンチを発掘するにつれて表土下50cmばかりで黄褐色粘土質土層があらわれ、これを掘りこんだ土壌の輪郭が確かめられるに至った。土壌のプランは東西4m余、南北3m弱のほぼ長方形を呈し、前方後円墳の南北主軸線に対して直交するように配置している。さらにこの南に隣接して平行するように東西2.4m、南北1.5mの土壌があらわれた。そこで前者を一号遺構、後者を二号遺構として記述することとする。

A 一 号 遺 構

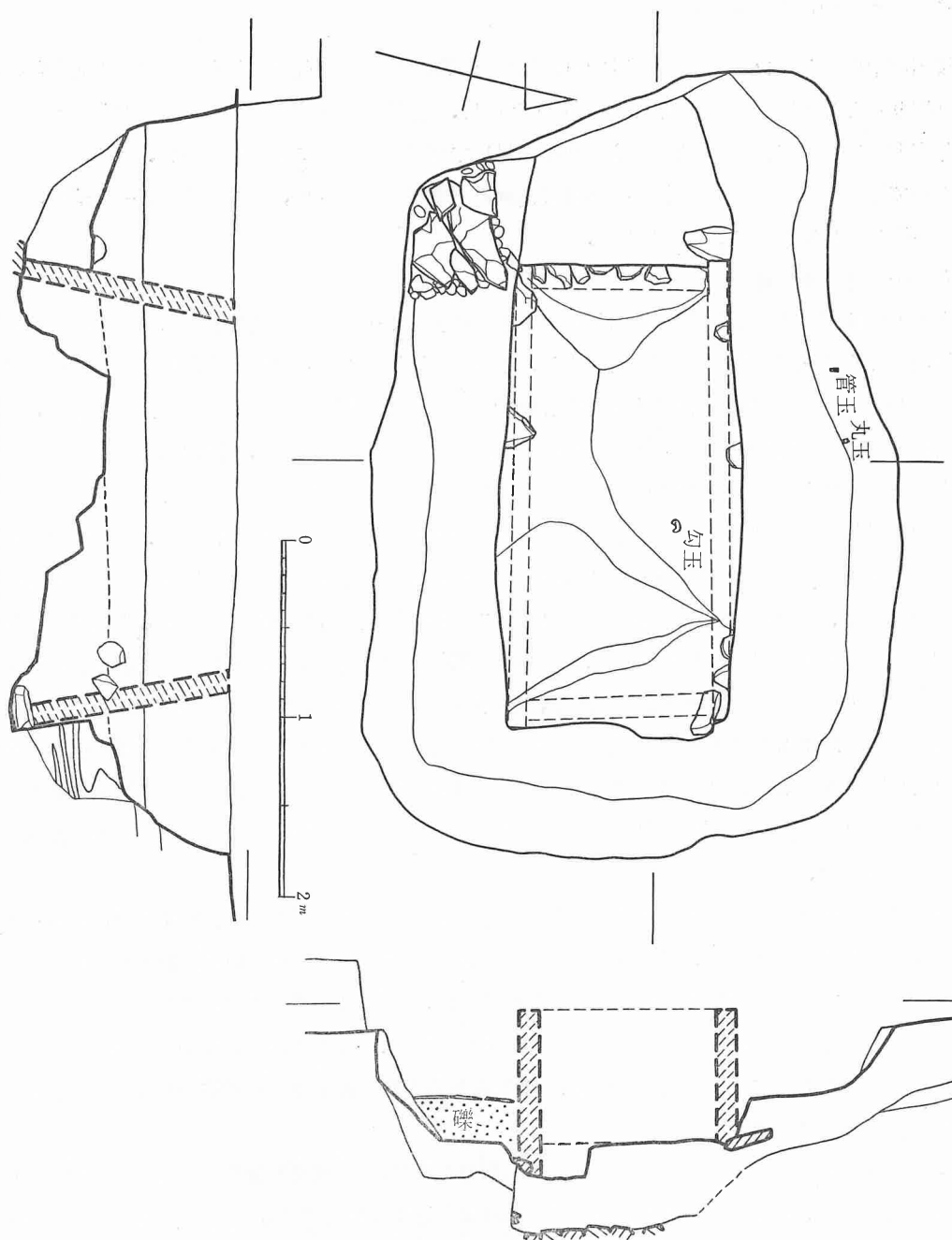
本土墳内は再三にわたる盗掘と石材の抜きとりによって一部墳形を変じ、また東西の小口棺壁材は棺床下深くに立てられていたので、抜き取りの際の発掘墳によって墳内は著しく荒らされる結果となった。本来の墳形は東西長4m、巾2.4mの長方形で、深さ1.2mであったと推定できる。その中央に緑色結晶片岩の板石を組合せた箱式石棺を据えていたようである。棺内中央部にあたると思われるあたりに土壌上面から70cmを測る深さで礫床の一部が残されている痕跡をつきとめることができた。丹の付着もみられるので、これが石棺内の床面であったことは疑いない。棺の壁材は引き抜かれたあとが、そのままにされていたので、石材の厚みや巾などを正確に知ることができたのは幸いであった。それによってみれば、石材の厚みは10cm程度のものを用い、おそらく四周壁は各々1枚の板石を使用していたと思われる。しかも東西の小口壁材は墳底にまで達しており、小石を並べて固めた上に立てられていたようである。その後土砂を充めて床上げして棺床をつくり、南北の長側壁材が立てられたようである。したがって小口材は長壁材よりも50cmくらい深い所から立てられていたことになり、しかも両側は長壁材に囲まれていたことになる。かくして復原される箱式石棺の内法は長さ2.3m、巾80cmとなり、深さも墳上面より上方に出ることはあるまいから70cmをこえることはない。

次にこの石棺と墳の間の空所は黒色、暗褐色などの粘土質土で埋められ、棺床とほぼ同レベルまでそのような状態であった。ところで墳内の南西隅には偶然にも棺材と同じ片岩板材の破片を平面に並べ敷き、その下に礫を充めた状態が残されていた。これは本来の状態と思われるので、このような状態で石棺の四周に施工されていたことが推察される。礫充めの厚さは30cmを測り、その上面に板石を敷きならべてあったことになる。敷石面から土壌上面までさらに30~40cmの落差がある。

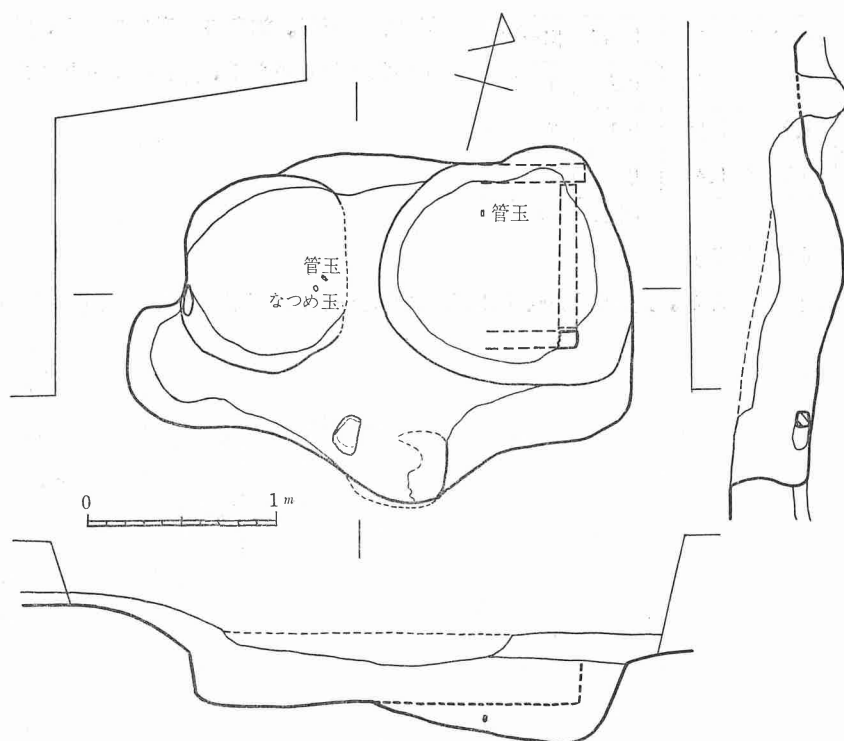
B 二 号 遺 構

一号遺構の北に発見された二号遺構はやや小形であるが、盗掘時の攪乱は前者より一段とはげしい状態であった。ここでも東西の小口壁材は墳底深く立てられていたらしく、その部分の盗掘穴は特に深く掘られている。墳の南側は後に掘り広げられており、本来の墳形は長さ2.2m、巾1.2mほどの長方形であったと思われる。ここでも棺床と思われる部分が棺内中央部あたりに残されており、墳の上面からの深さは56cmであるから、石棺の深さもこれをこえることはないであろう。一号遺構のように石棺の内法を正確に知りうる痕跡はのこされていないが、東南隅に厚み10cm弱の板材の末端が検出された。墳形とあわせて復原してみれば組合石棺の内法は最大限で長さ1.8m、巾80cmとな

第3図 第一号遺構実測図



る。その場合は石棺の大きさはほとんど墳形いっぱいになるので、一号石棺のように石棺と墳壁の間を埋める必要はほとんどないこととなる。いずれにせよ、石棺の構造は一号石棺のそれときわめて類似したもので、大きさを縮小したにすぎなかったであろう。



第4図 第二号遺構実測図

C 遺 物

前述したように、二基の石棺内からは刀剣、玉などの出土が伝えられているが、今回の調査によってもそれを立証するような結果をえた。しかし、その出土状態はいずれも本来の副葬状態を示すものではなかった。再三の盗掘で土壌内の掘穴中に流入し、あるいは土壌周辺に攪乱された状態で発見された。したがってその出土状態については特筆する必要はないであろう。墳内から発見されて確実にその所属を知りうるものは次のとおりである。

一号石棺 硬玉勾玉1、碧玉管玉1、ガラス丸玉1、鉄鏃3

二号石棺 硬玉棗玉1、碧玉管玉2、鉄刀片4、鉈片1

このほか形態不明となった鉄片が両棺から出土しているので、両棺に副葬されていた遺物の数量、種類はさらに多かったはずである。両棺土壌の周囲から発見される鉄器片については、いずれの棺に所属したものかきめられない。その中に三角板革綴短甲の存在を思わせる鉄板片が検出されている。以下遺物について簡単に説明を加えておこう。

勾玉 一個(第5図1)

良質の硬玉で、淡緑色半透明。背のあたりに白斑がみられるが、翡翠の部類に入れてよいかも知れない。全長2.7cm、厚み腹部で1cm、頭部から尾部に徐々に大きさを減じていく。穿孔は2～3mmの片割りである。

管玉 三個 (第5図2~4)

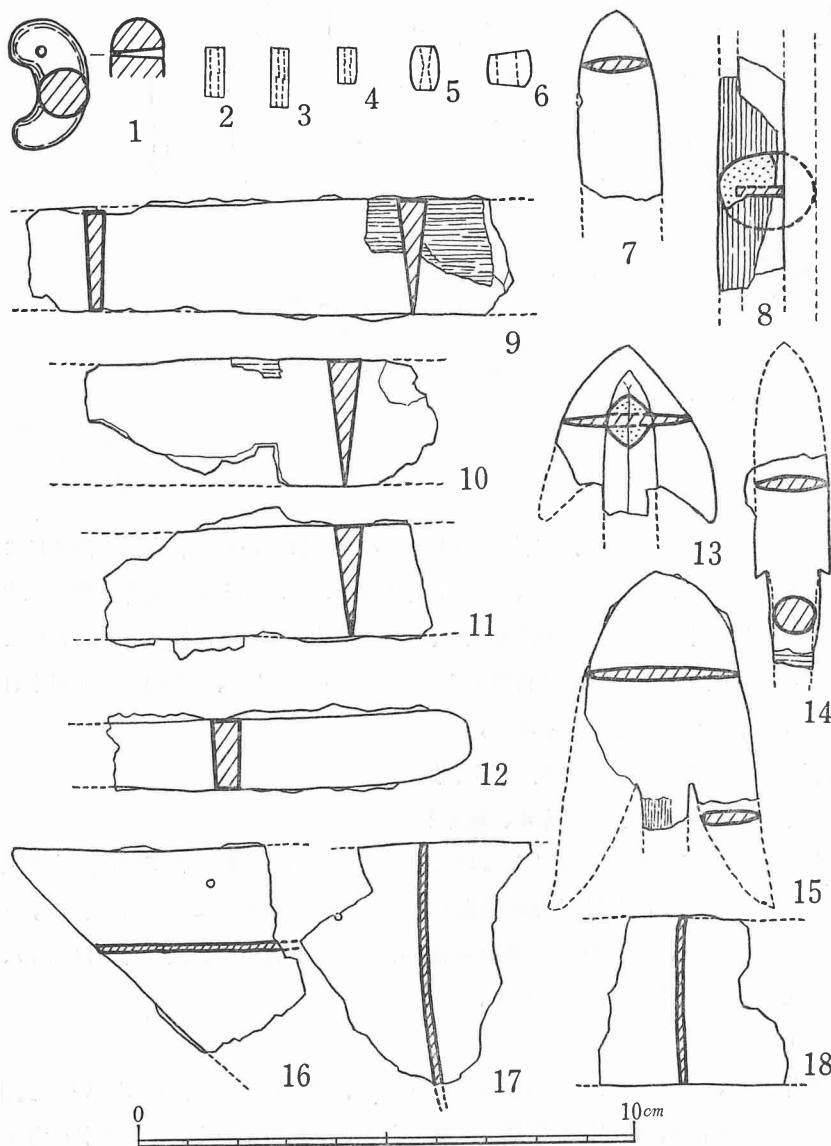
	長さ	径	孔径	出土棺
1	1.0	0.4	0.2	1号
2	1.2	0.35	0.1	2号
3	0.75	0.4	0.2	2号

(単位・cm)

濃緑色碧玉製。細身の小形品である。計測値は表示したとおりである。穿孔は両割りである。

棗玉 1個 (第5図5)

緑色白斑の硬玉製である。長さ0.85cm、径は両端で3.5mm、ふくらんだ中央で6mmを測る。



丸玉 1個

(第5図6)

コバルト・ブルー色のガラス製で厚み6.5mm、径9mmである。

鉄刀片 若干

(第5図9~12)

二号棺より発見された破片は刀身巾2.5cm、背の厚み6mmの直刀である。茎尻の部分は巾1.4cm、厚み5.5mmである。

劔身片 1個

(第5図7)

切先にふくらみのある残片がある。身巾1.7cm、厚み4mmである。小短劔であろう。

鉈片 1個

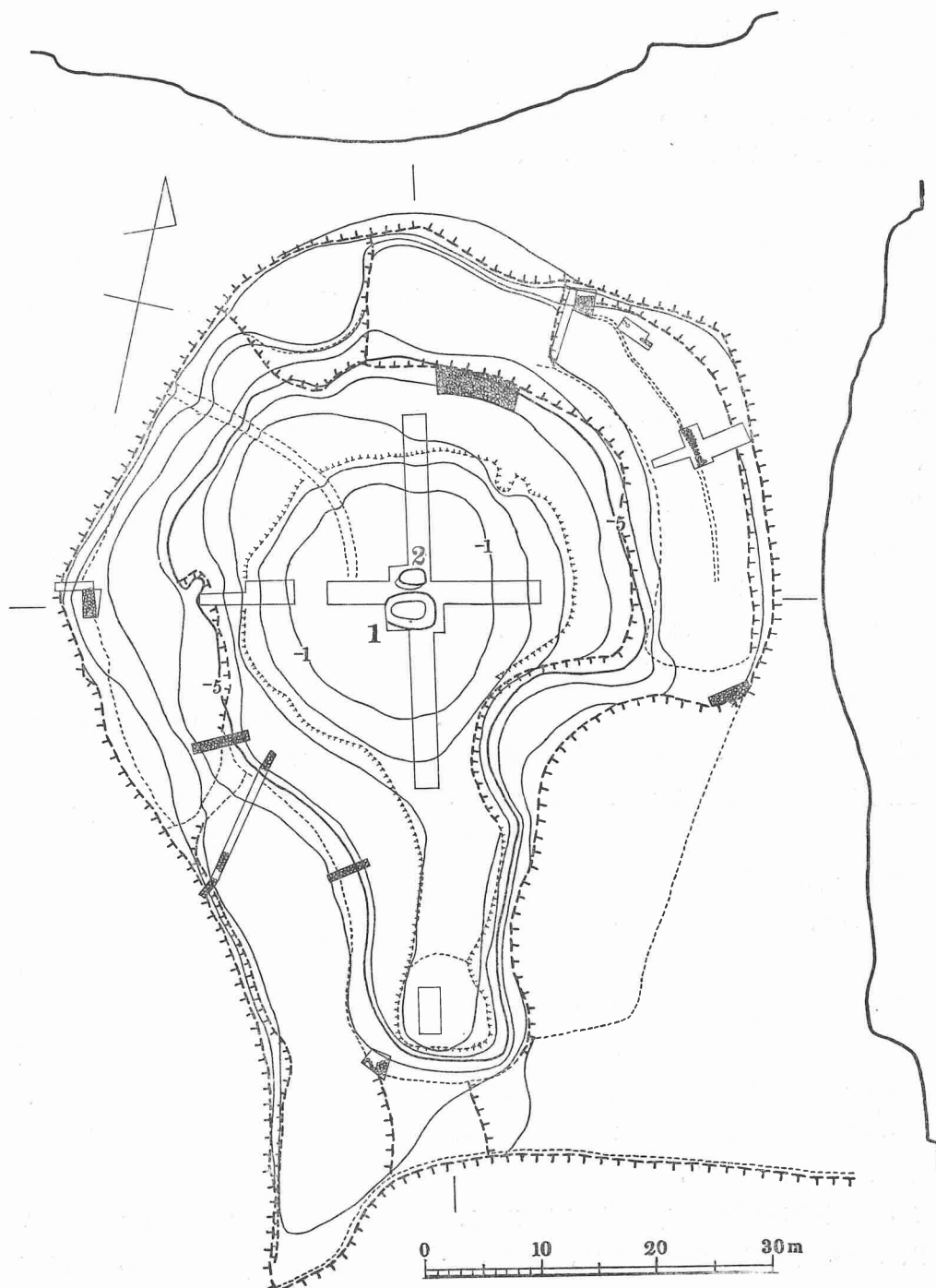
(第5図8)

巾9mm、厚み

第5図 出土遺物実測図

2mmの細長い鉄片に木材の付着したものがある。木柄を復原した状態で考えれば径1.7cmほどになるうと思われる。おそらく鉈の木柄装着部分に相当するであろう。

鉄鍬 三個（第5図13~15）



第6図 御陵古墳外形実測図

扁平三角形状のものと柳葉状のものの2種がある。前者は正三角形状をなし両側末端が腸袂を形成するもの(13)と、鋒部にふくらみをつけた長三角形腸袂つきのもの(15)がある。13は無茎で矢柄に挟まれるが、15は有茎である。後者は樺巻きの痕跡をとどめている。いずれも古式の形成を示す鉄である。

短甲片 三個(第5図16~18)

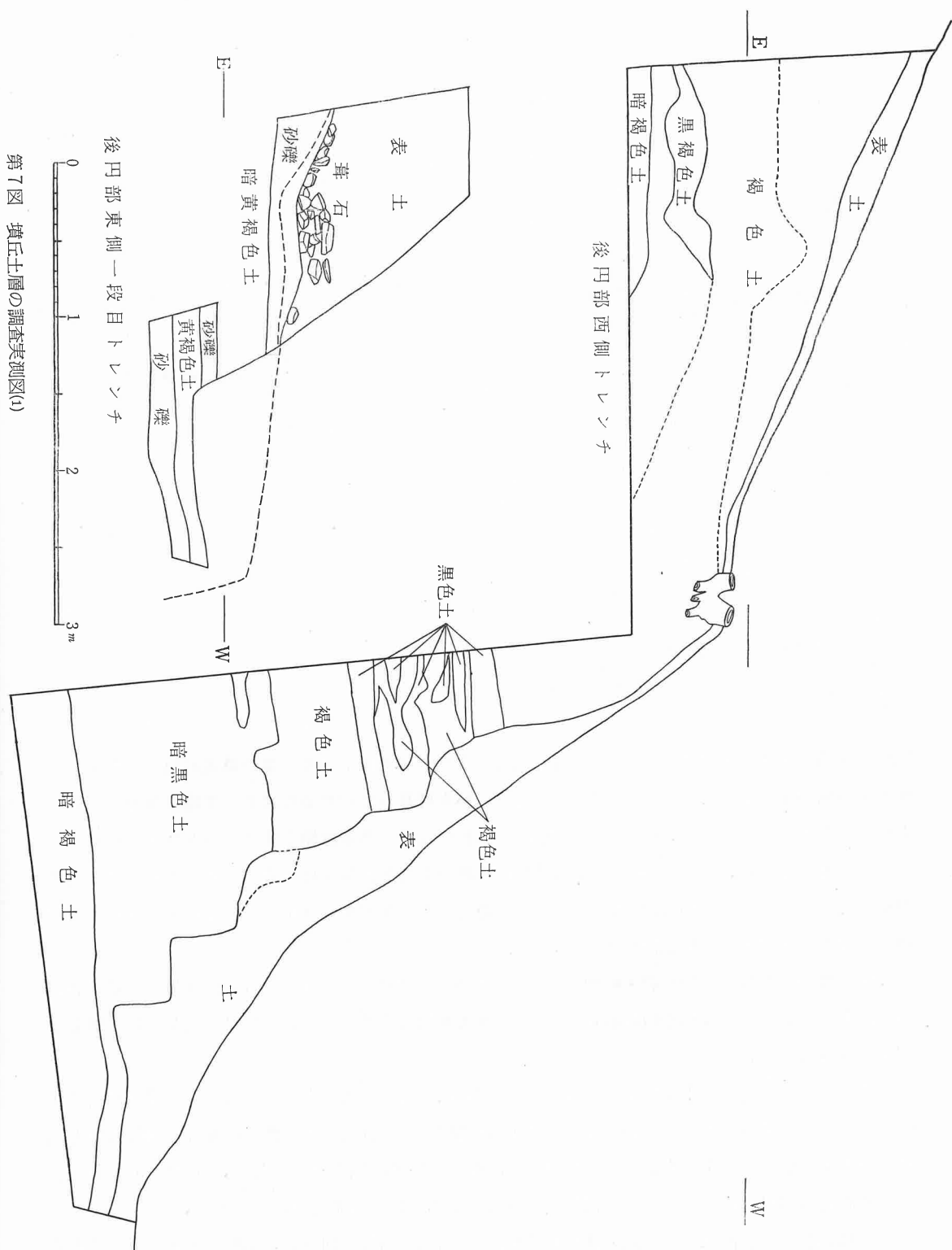
三角板革綴短甲を形成していたと思われる鉄板片がある。幸いにも三角板の形態をのこすものが一枚あり(16)、綴孔もみられる。このほか横板と思われる破片(18)もあって、少なくとも短甲一領分が副葬されていたことは疑いないであろう。

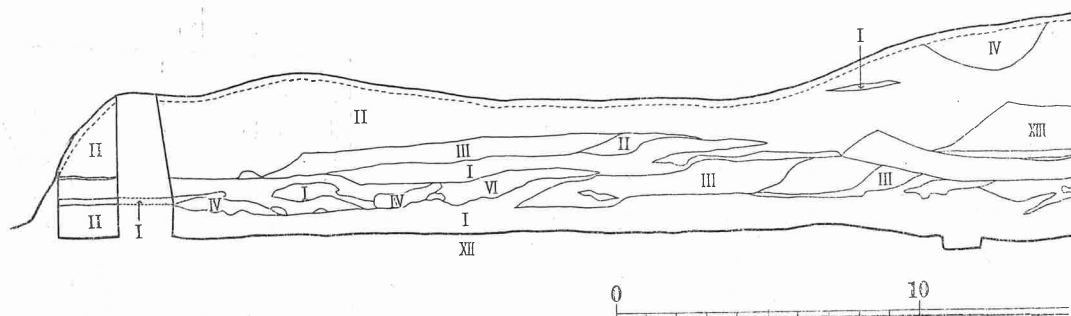
6. 古墳外形の調査

古墳は南北方向に主軸をおく前方後円墳で、前方部を南に向けている。正確には主軸線の北は磁北より15度西偏している。調査時にはすでに42年度の工事で墳丘の裾は削りとられて旧状を変貌していた。それでも古墳の外形はまだのこされていたので伐採を行って墳形を一周してみると、後円部と前方部の西側は原形を保っていた。東側の前方部と後円部のくびれるあたりは大きく削られているが、これはかなり以前の採土によるものと思われた。また後円部の北側から東側にかけての一段目はかって畠として開墾されたためにかきひろげられて原形を損じていた。墳丘の全長75m、後円部径55m、前方部長20m、前方部先端巾20m、後円部高さ9m、前方部高さ6mを測る。後円部中央に内部主体をさがすトレンチを設定したが、これを東西と南北にのぼし、また葺石や埴輪などの存否をさがして墳丘の各所にトレンチを設けた。その結果、二段築成された墳丘の各段に栗石を葺いた葺石の状態があらわれた。しかしながら本来、葺き方が入念でなかったためか保存状態はあまりよくなかった。流失した部分が各所にみられるが、一部には基礎に大きい石を縁石として並べていた状態が知られるようなところもあった。東側くびれ部のトレンチでは葺石上に埴輪円筒片が落下したような状態が発見されたので、墳丘に円筒埴輪が使用されていたことは確実である。

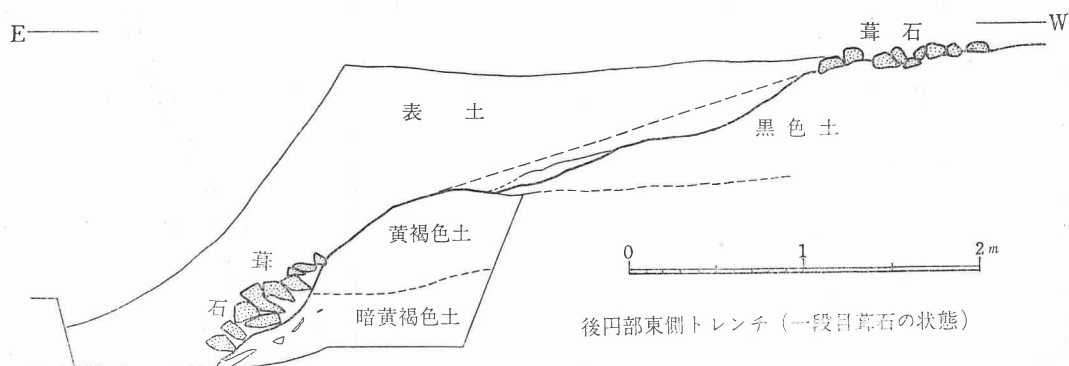
前方後円墳の主軸線にそって封土の東半分を除去して築成状態を実測した結果では、墳丘一段目にみられる黄色地山層(XII層)の上に黒色土、褐色土など10種にのぼる土砂を帯状に積み重ねて墳頂にいたっている。表面からブルドーザーで掘り下げていくにつれて封土は湿気を増してくるが、火山灰土かと思われる黒色土(I層)中には笹竹の根が色調も生々しく発見されて、この付近の古墳築成当時の地表が黒色土でおおわれていて竹藪の状況を呈していた景観が想像できたのである。また葺石面の上には50cmから1mにおよぶ土砂の堆積がみられるので、築成当初の墳丘頂上には長い間に封土がかなり裾部に流失堆積して本来の姿を変貌していることも知られたのであった。葺石の水平巾は3~3.5mで一段目と二段面の築成斜面にめぐらされているが、くびれ部では4mをこえる状態であったようである。

総じて古墳の外形は狭長な前方部が形成されていて、前方部も先端までさして巾を広げる状態もみられず、高さも後円部より3mほど低い。すなわち古式の前方後円墳の姿をとどめていることが指摘できるのであろう。





第9図 御陵古墳墳丘縦断面土層図



第8図 墳丘土層の調査実測図(2)

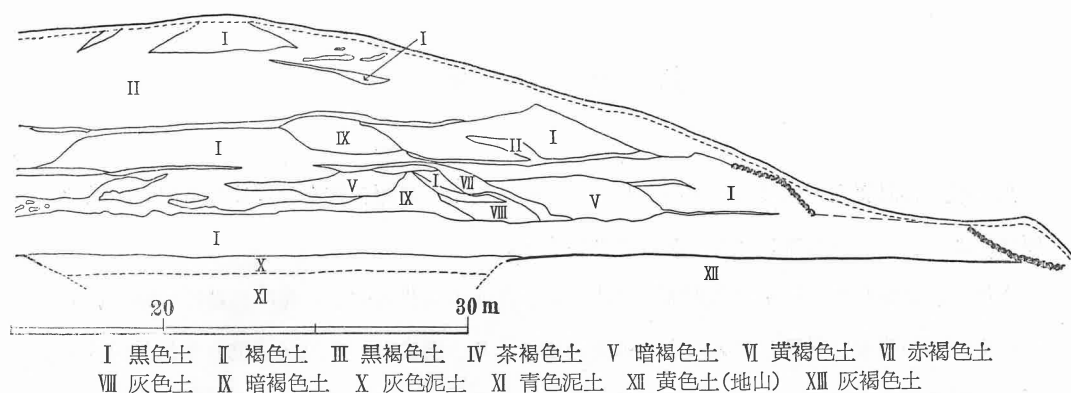
7 結 語

御陵古墳は主体部をすでに盗掘されていたが、今回の調査によって二基の箱式石棺を内部主体とする前方後円墳であることが明らかとなった。しかも残存していた遺物によって時期を推定することができるのは幸いである。玉の形態、鉄鏃の形態には古式古墳に出土するものと共通した特徴を認めることができる。また小短剣、鉈、三角板革綴短甲などの存在は五世紀の後半よりさげる必要がないことと、さらに墳形に古式の様相をとめている点などをも考慮して本古墳の年代を五世紀中ごろ前後に比定するのが穏当であろう。

豊前、豊後にわたる古代々豊々の国の地域にあっては畿内型古墳が伝播したとき以来、箱式石棺が内部主体にとり入れられる傾向が強く、これは北九州の筑肥沿岸にみられる畿内型古墳と顕著な対照をみせている。

(1)
御陵古墳は全長75メートルにも達する大古墳であり、周辺の古墳と比較してみても特別に群を抜いている。この地域は古代において大分郡植田郷に属していたが、大分郡内にあって御陵古墳と同時代の古墳を検討してみても、これを凌駕するような大古墳は知られていない。したがって御陵古墳の被葬者は五世紀代における大分郡最大の権力者であったと考えて支障あるまい。

「古事記」中巻、神武天皇の段に神八井耳命は火君、大分君、阿蘇君、筑紫三家連らの祖であるとみえている。また、「日本書紀」巻28、天武天皇元年6月条に大分君恵尺、大分君稚臣(稚見)とみえている。また、「日本書紀」巻28、天武天皇元年6月条に大分君恵尺、大分君稚臣(稚見)とみえている。



の名がみえている。さらに書紀巻7の景行天皇12年10月条に、「碩田国に到りたまふ。其の地形広く大きにして亦麗し。因りて碩田と名く。碩田、此をば於保岐陀と云ふ」とみえ、「豊後風土記」大分郡の条にも、「昔者、纏向日代宮御宇天皇、豊前国の京都の行宮より此の郡に幸し、地形を遊覧して嘆き曰く、広く大きなるかも此の郡や。宜しく碩田国、(碩田は大分と謂ふ)と名づくべし。今大分と謂ふは斯其の縁なり。」と同様な国名の由来が記されている。景行天皇の九州巡幸説話が考古学的にみて5世紀代の史実を反映していると考えられることなどをも考えるならば、大分郡地方が古くは碩田(大分)国と称されていて、碩田(大分)⁽²⁾君なる豪族が拠っていたことも知られるであろう。古代における「君(キミ)」なる尊称が地方を統治する豪族に冠せられていたことも周知のことである。このように推考してみると、5世紀代における大分郡最大の古墳であること、また前方後円墳の形式を採用していることなどから、御陵古墳の被葬者は大分国を統治した大分君であったとすることはきわめて妥当性に富むものであろう。おそらく大和朝廷から大分地方を統治する県主的身分に封ぜられた大分君宗家の墳墓であったと考えられる。やがて6世紀代に下ると主要古墳の舞台は大分川流域にうつり、その北側山麓ぞいに丑殿古墳(円墳、横穴式石室、家形石棺)千代丸古墳(円墳、横穴式石室、装飾)などが数えられるようになる。地理的環境、生産力の増強などの必要から木の上地区は限界に達したのであろうか。やがて律令時代に下ると大分川流域に国府や国分寺が設置された事情ともあわせ考えるとき、大分川流域の優位性は否定できないであろう。ここにいたって以上のような歴史的 position を占めていた御陵古墳が、現代の開発の波に呑みこまれてしまったことは惜しみてもなお余りある遺跡であった。

(1972. 2. 16稿了、文責 小田富士雄)

註 (1) 小田富士雄「畿内型古墳の伝播」(古代の日本3・九州)昭和45年

(2) 小田富士雄「九州」(日本の考古学IV・古墳時代・上)昭和41年

(3) 井上光貞「国造制の成立」(大化改新)昭和45年

あ　と　が　き

大分県文化財調査報告書の第24輯として、「御陵古墳」の報告書をお届けします。諸般の事情により刊行が遅れましたことをお詫びします。

文化室が発足して一年を経た現在、文化財保存体制の強化という永年の課題について、ようやく一つの明るい見通しをえたように思います。この間における県民各位の文化財保護に対する関心は、御陵古墳を失った昭和43年度に比しても、隔世の感があります。

少なくとも現在の時点においてなら、御陵古墳ほどの遺跡を失うことはなかったと思うにつけても、文化財の保存運動にとって、そのための体制づくりと、県民の広い支援と関心とが、いかに必要なことであるかを痛感する次第です。

文化財を失うことは、ある意味でわたしたちが民族的、歴史的な根なし草となるということでしょう。時代は、遠い過去の文化遺産を守る事業が、当面する諸開発事業と同じように、あるいはそれ以上に永い未来を見通したビジョンと想像力を必要とするところにきています。

皆さんの、今後のいっそうのご協力とご支援とをあらためておねがいするゆえんです。

昭和 47 年 3 月

大分県教育庁文化室長

田　村　卓　夫



遺 跡 遠 望 (西より)

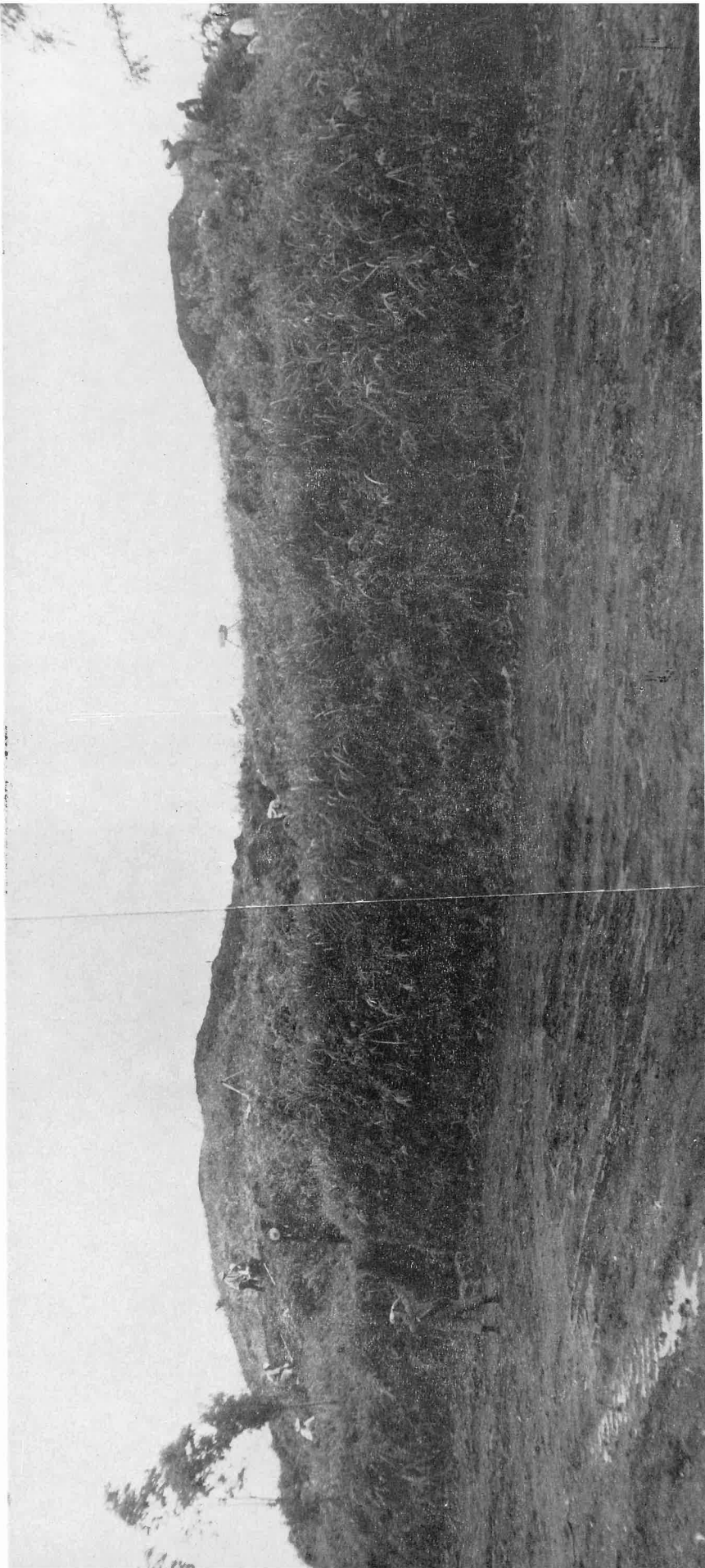


調 査 前 の 遺 跡 近 景 (北より)

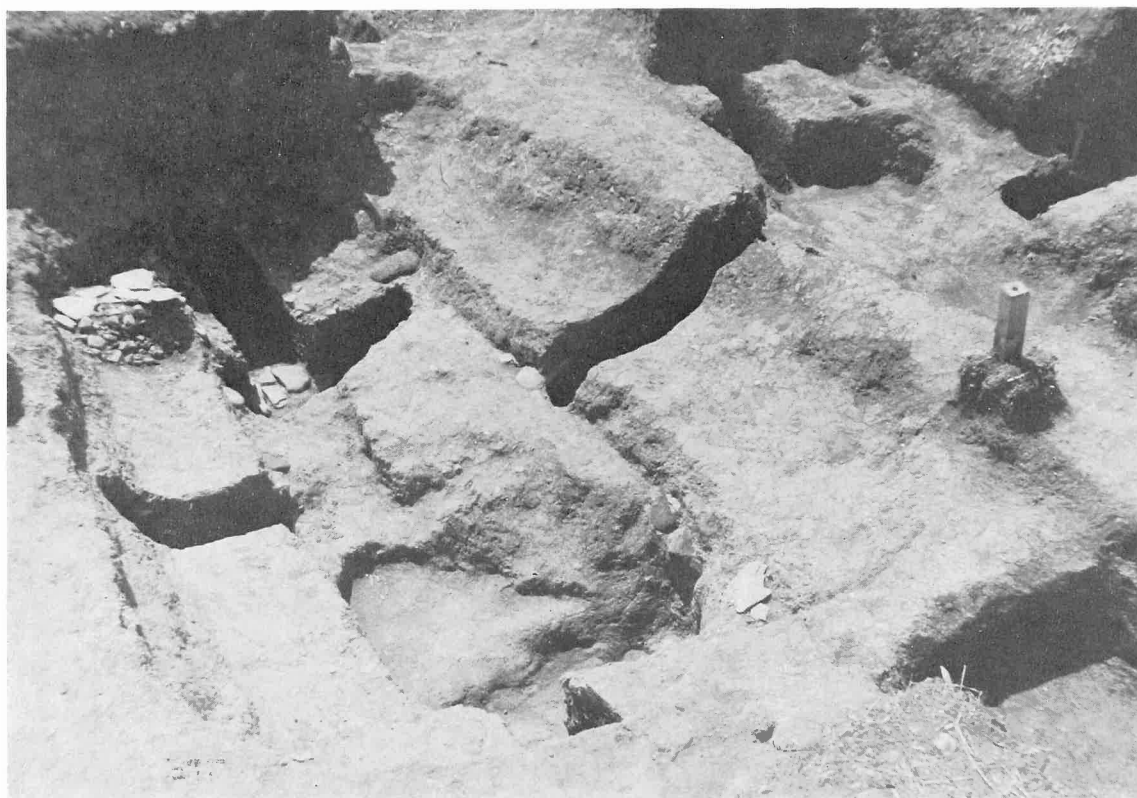


空から見た古墳

朝日新聞西部本社提供 (1968.5.13 撮影)



墳丘近景 (右=前方部・左=後円部)



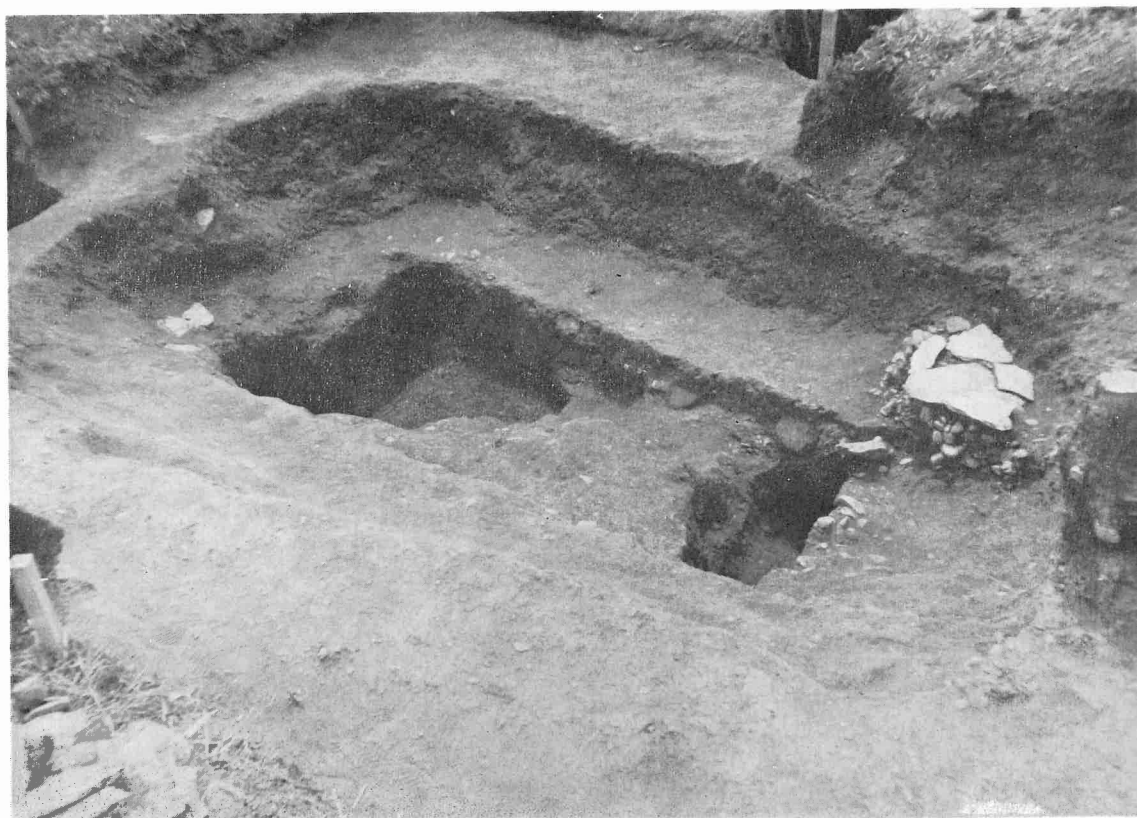
後円部内部遺構 (左=一号・右=二号)



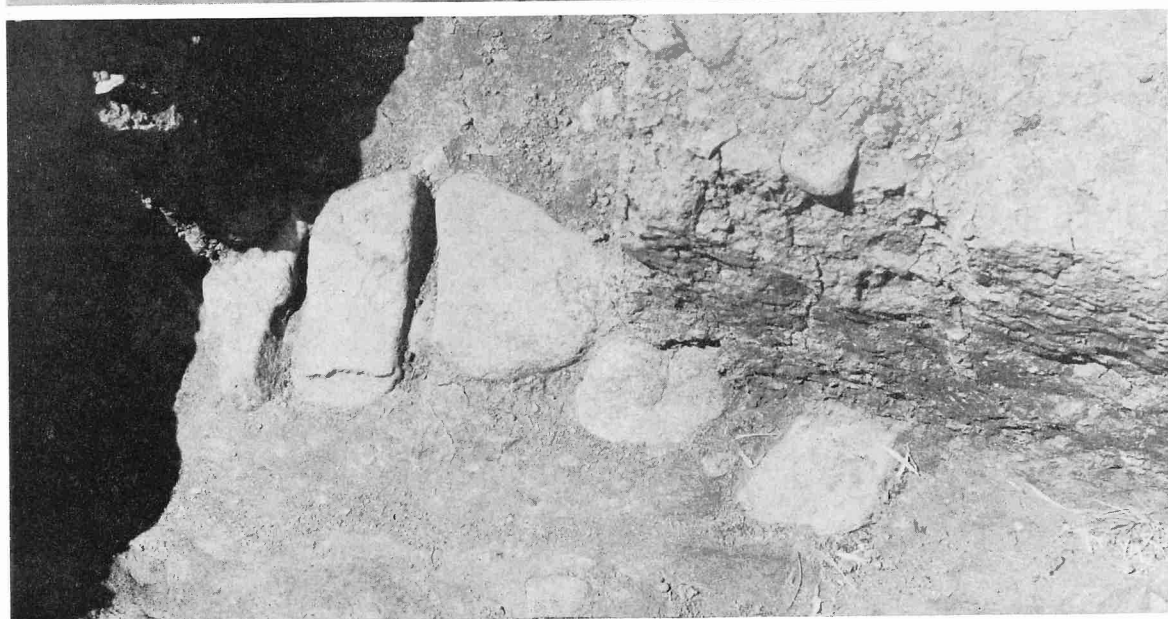
二 号 遺 構



一 号 遺 構 (東南より)



一 号 遺 構 (北西より)

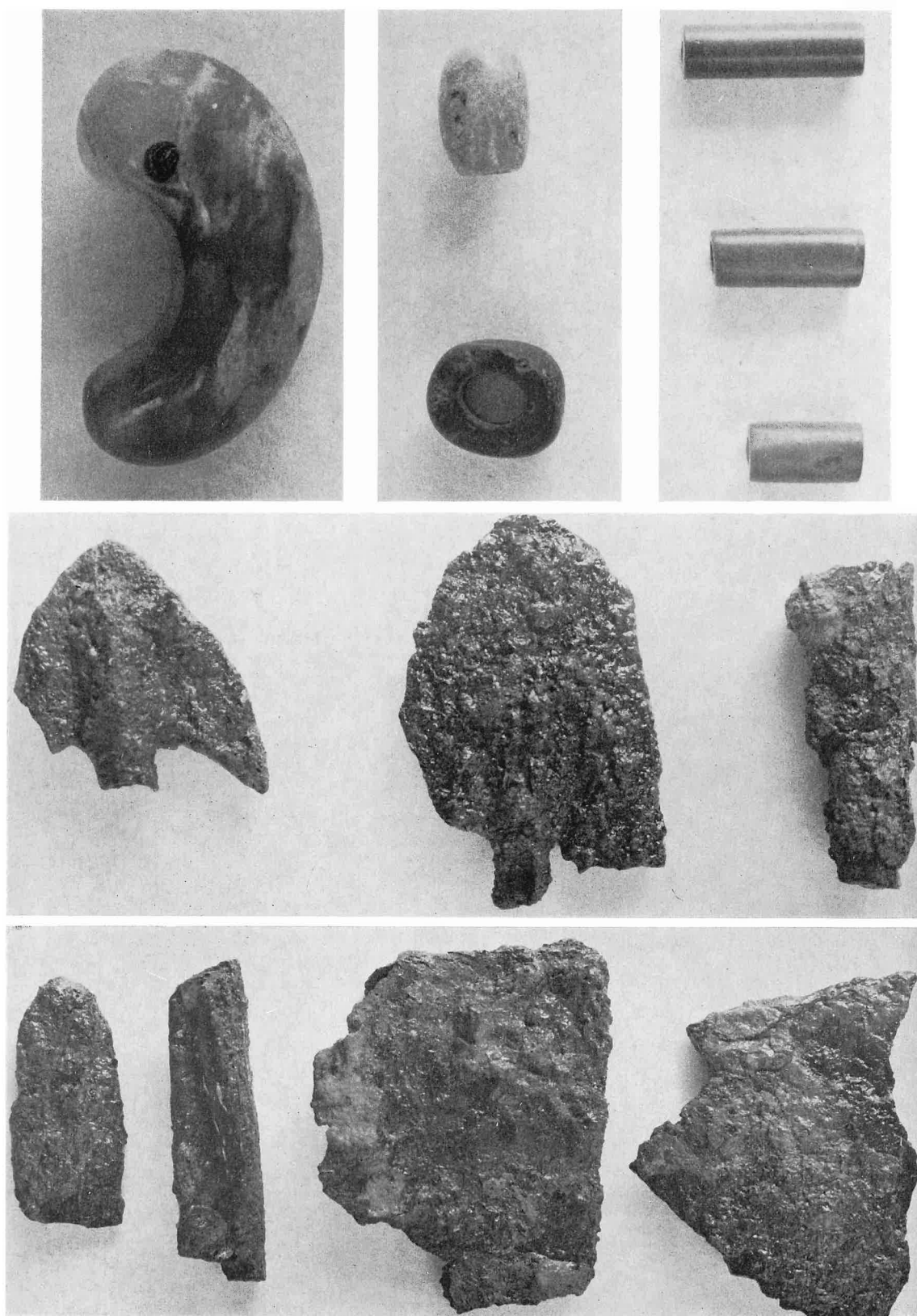




一号遺構——勾玉・管玉・丸玉 出土狀態

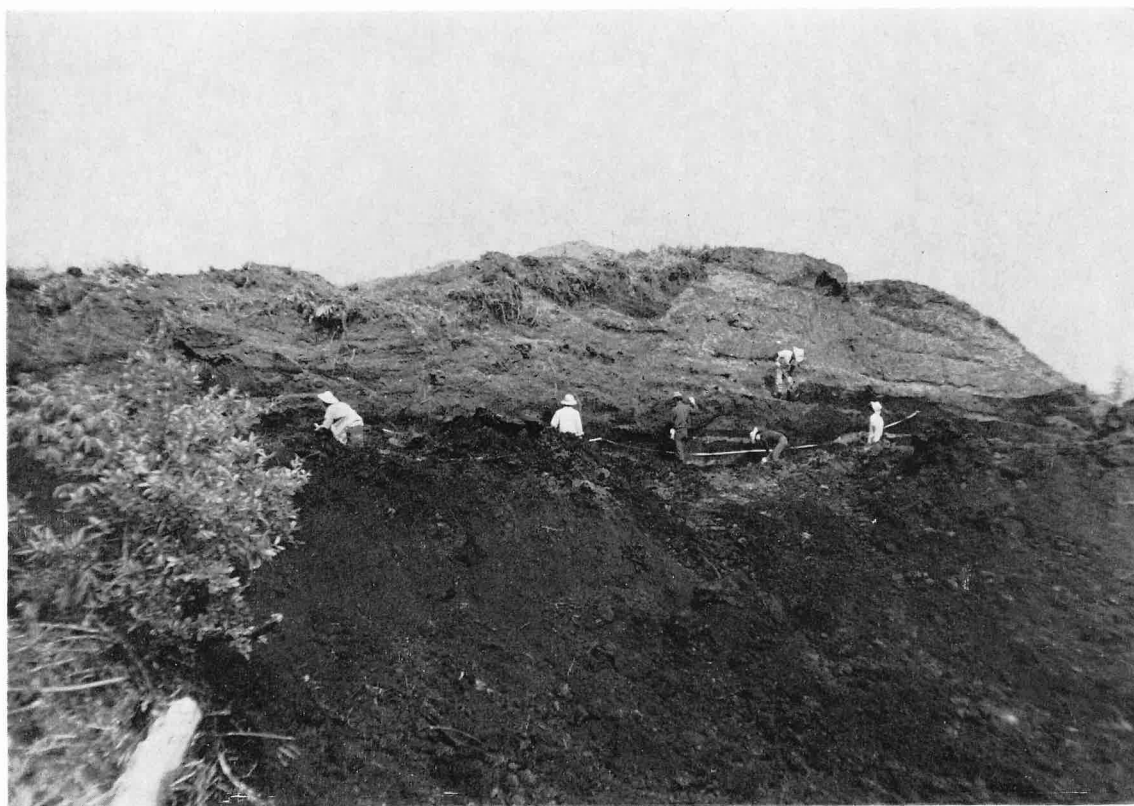


二号遺構——管玉・棗玉 出土狀態



後円部内部主体発見遺物

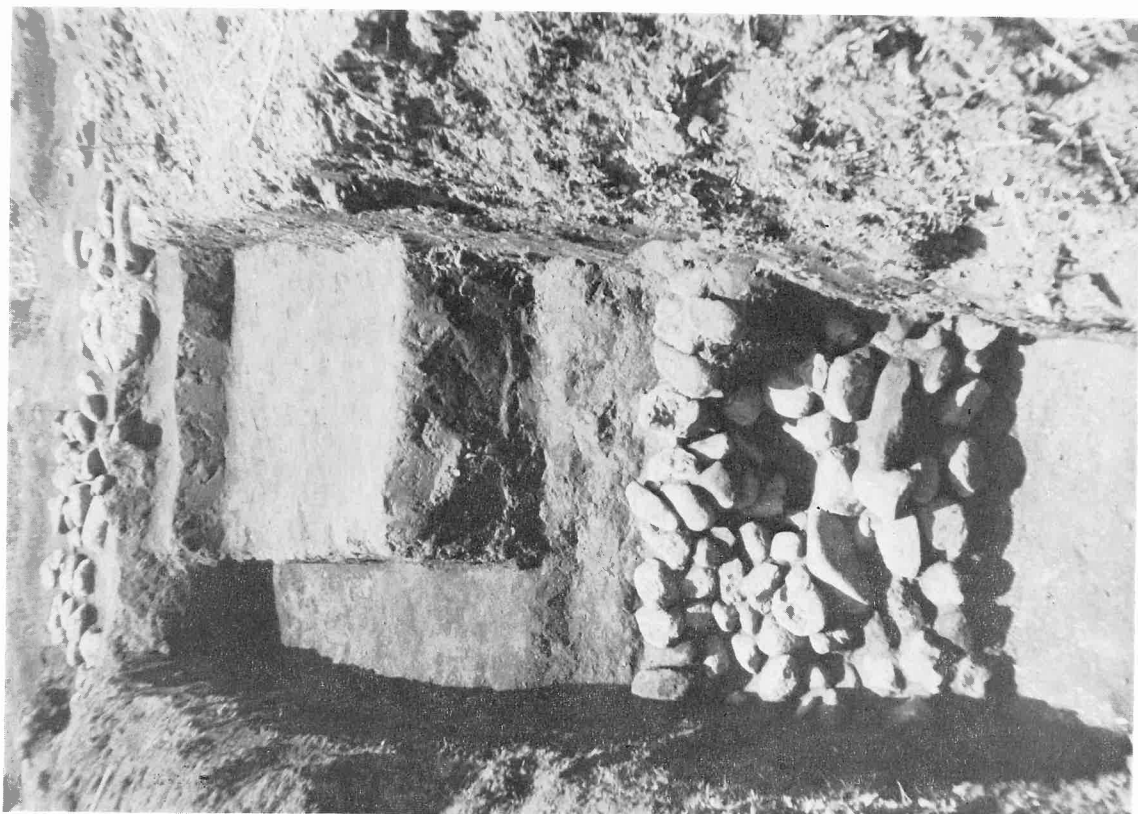
上段：勾玉、棗玉、丸玉、管玉（2.5倍大）
 中段：鉄鏃
 下段：短剣、鉈、短甲 }（約実大）



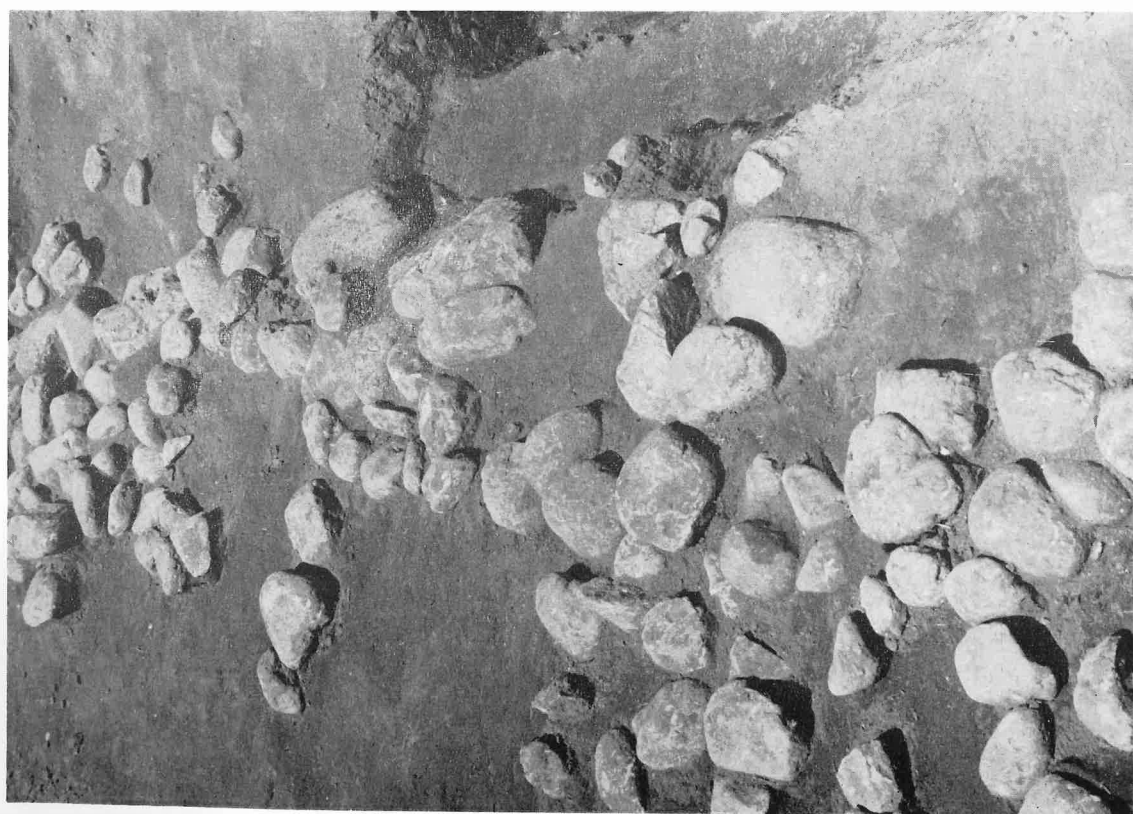
墳丘切断作業



墳丘切断作業——後円部



後田部北側墓石出土状態（一段目）



後田部北側墓石出土状態（一段目）



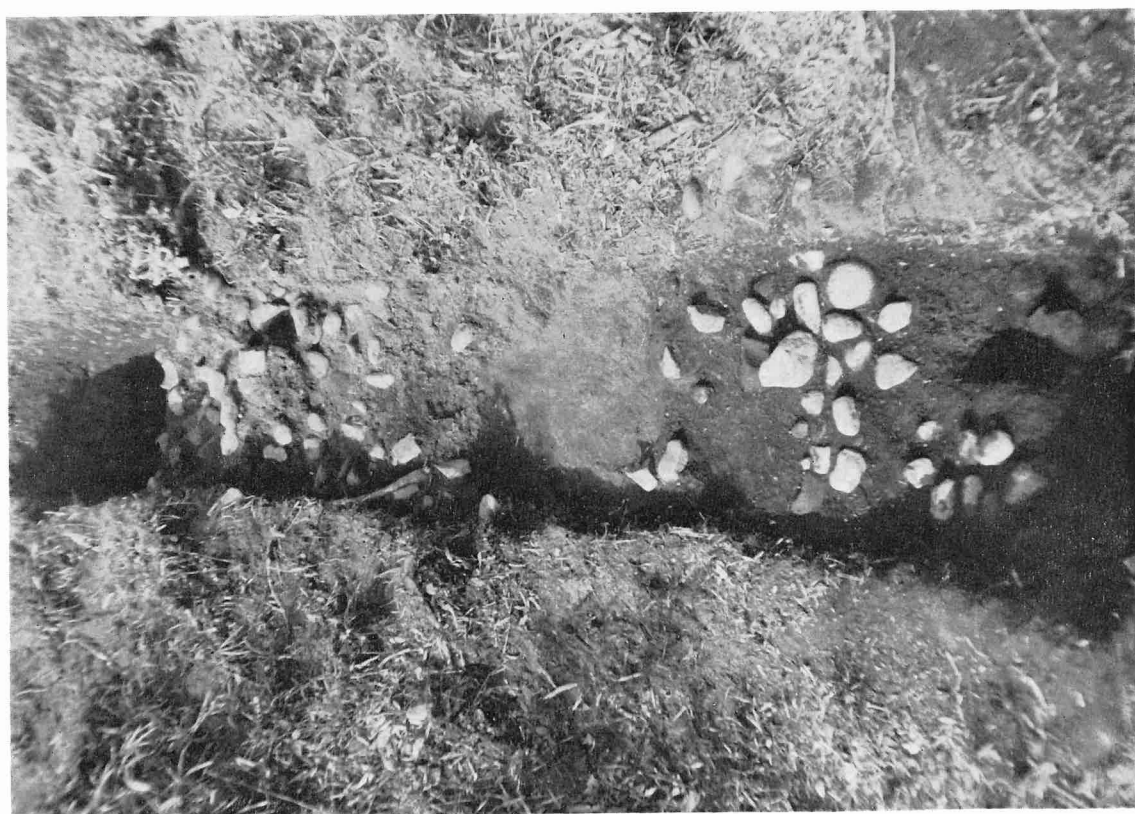
後円部東側葺石出土状態（一段目）



後円部東側葺石の二次的集積（一段目）



後凹部重創墓石出土状態（二段目）





図版 13

上・前方部南西隅葺石出土状態
下・前方部東側葺石出土状態



御陵古墳緊急発掘調査

大分県文化財調査報告 第24輯

一 昭和43年度緊急発掘調査 一

昭和47年 3 月30日発行(非売品)

編 集 大 分 県 教 育 委 員 会

発 行 大分県文化財愛護地域活動推進協議会

印 刷 所 有 限 会 社 第 一 印 刷 社

大分市城崎町 1 丁目
